

要約筆記

木村鉄太 日本開国の先駆者

崇城大学教授 松本 寿三郎

はじめに

今日のテーマは、「木村鉄太 日本開国の先駆者」ということです、今は有名になりましたのでご存知だと思いますが、熊本出身の木村鉄太というの方が、日米修好通商条約の批准の使節団に加わってアメリカからヨーロッパを回って、世界一周をしたという方がおられる訳です。

その方が「航米記」という報告書を出しまして、400 ページくらいの本になってると思いますが、今から 30 年ほど前に出版されますが、その著者が木村鉄太ということで、いわゆる条約批准の使節のことをお話しするということでもあります。

1. 日米通商条約批准への道

まず、最初のページには、日米修好通商条約の批准にいたる、18 世紀の末から 19 世紀のはじめの日本を巡る国際条約について一枚にまとめております。日本が世界史の中に入ってくるというのは、ロシアが最初なんですね。

1792 年にラクスマンというのがやってきます。ロシア人がいわゆる蝦夷地、北海道に盛んに進出するものですから、それで日本では仙台の学者が蝦夷の経営をしなければならん、ということを唱える人たちが出るわけです。プリントには出てませんが、林子平が、「海国兵談」というのを書きまして、日本の海はヨーロッパの海まで続いているんだと。

日本はあまり防備を固めてないけれど、北の方は当時は蝦夷地というのですが、北海道にロシアがどんどん進出してきておるのではないかと。それで防備を固めないといけないということ言うのです。そのときの老中、松平定信が、そういうことをいえば、日本の国民は非常に驚かせる、国民をあわてさせるという訳です。

彼が言ったのはどういった事を言ってるかといいますと、江戸前の海はずっとヨーロッパの方まで通じておって、テムズ川に通じてるんだと。だから船が直接に江戸前にくるということを警告したわけで、だから日本は防備をしなくちゃいかんと。ところがそういう事を言ったんでは国民が非常に恐怖におののくのではないかと、というので松平定信は、その海国兵談を発売禁止にするのであります。しかし、松平定信はさすがに老中でありまして、発売禁止にしたけれども、自分はきちんと海防の必要性は感じて江戸湾に砲台を作って守りを固めるわけです。実際、イギリスは来なかったということでありまして、ロシアがやってきましたですね。

それが刺激になって、北方への関心が高まり上から四段目くらいのところに 1798 年寛政 10 年に、近藤重蔵がエトロフに「大日本恵土呂府」の標木を立てる、というのが出ておりますが、これが日本の北方領土であります。北方領土というのは歯舞、色丹、国後、択捉と四つあるわけですね、歯舞、色丹というのは一番、知床に近いところで、その向こうに国後、択捉というのがある訳です。

その択捉に近藤重蔵が探検に行きましてですね、そしてそこに「大日本恵土呂府」の標木を立てるわけです。ここまでが日本の領土であるということで、ですから今盛んにまだ、北方領土問題で二島返還とか、四島返還とかいう、その根拠はここにあるわけですね。その後、イギリスだとかアメリカだとかが日本周辺に盛んに来るわけです。何をしに来るのかといいますと、これは、太平洋に鯨を獲りに来る

わけなんです。太平洋に鯨を捕りにきて、鯨をどうするかというと、その鯨の脂を燃料にするわけであり
ます。当時は燃える水、石油は使わないわけですから鯨の脂を燃料にする訳す。そのために太平洋に鯨
を獲りに来て、そして、薪と水と食料を提供して欲しいというわけで、それで日本にやってくる訳です。

そして、1824 年文政 7 年にイギリスの船が常陸の国・大津浜にイギリス人が上陸しまして、そこで
水と食料を要求するわけです。九州の方では、7 月に宝島に上陸をして牛を略奪した。宝島というのは、
丁度、鹿児島県と奄美大島の間にトカラ列島というのがありますが、その後から列島の一番南の方にあ
る宝島に上陸して、水と食料をよこせという訳ですが、島の人達は逃げたものですから、それで結局、
牛を捕まえて持っていったわけですね。これがきっかけとなりまして、翌年に無二念打払令、外国船が
来たら二念なく打ち払えと、というのがここから始まるわけでありまして。

10 年後になりましてですね、今度はモリソン号という、アメリカの船がですね。これが太平洋で漂
流民を救済しました。長崎だとか土佐だとかの海岸の漁民が漂流しまして、それをモリソン号が助け出
すわけです。漂流している日本人、漁民を救済して、そのまま日本に連れてくるのではなくて、帰国の
途中のために一度向こうに連れて帰るわけで、そして、その後何ヶ月か経って、日本に送り返そうと、
人道的な立場から送還しようとするのです。ところが、日本では、外国船が来たら二念無く打ち払えと
いう体制にあったのです。そこで起きましたのが、1837 年のモリソン号事件というものでありまして、
浦賀に連れてきたら、浦賀で砲撃されるわけで。モリソン号は、日本人の漂流民を送り返しにきている
訳ですから、今度は薩摩に連れてくる、薩摩でも砲撃をされるという事件が起きるわけです。

モリソン号が帰国途中に、漂流民を連れて帰って、今度来航の時日本に連れてくるという情報は、蘭
学者を通じて国際的には分かっている訳です。ですから、蘭学者の平賀源内という有名な蘭学者がおり
ますが、この人などは、「日本に人道的に送り返してくるのを攻撃するとは何事か」という事を言うん
ですが。結局、ご存知のように平賀源内などは、捕まって、そして処刑される。というような、事件が
起こっております。

いよいよ話が変わるのがですね。1840 年にアヘン戦争が起こる訳です。無二念打払令で打ち払って
いると戦争になるのではないかな。戦争になったら、イギリスと清がアヘン戦争で、戦争したら領土を取
られたではないか。この時に香港を取られた訳でありますから、これは大変だ。という事になって、日
本の心ある人達は、開国を考えなければいけないのではか、というような話が、どんどん出てくるわけ
であります。片方では、砲台を作って、警備を固めなければいけない、いよいよの時は、開国をしなけ
ればいけない、戦争になったら、ダメだぞ。という話になるのであります。そういう段階で、1853 年
の嘉永 6 年に、アメリカの東インド艦隊司令官ペリーが浦賀にやって来た。この人が大統領の書簡を持
って来て、そして、通商を要求する訳ですね。

今まで日本は、外国船は二念なく打ち払え、と言っておりましたが、浦賀の沖の江戸湾に、そういう
大きな軍艦がやってきて、祝砲を打ったりする、という事になると、もうこれは、とてもじゃないが考
えなきゃいかん、という事になりましてですね。そして、翌年に神奈川条約、日米和親条約というのが、
これは、和親条約ですから、港を開く、という、そういう条約を結ぶことになる訳です。その結果、1856
年安政 3 年に、初代駐日総領事ハリスがですね、下田に着任する訳であります。このハリスが条約を結
ばなければならない。日米和親条約だけではなくて、通商条約を結ばなければならない、という事にな
りまして、日米交渉の結果、日米修好通商条約というのが結ばれる訳です。

この時、幕府は、自分だけでは、もう国際条約を結ぶという事についてのですね、勅許を求める。天皇に許可を求める。という事が、初めて行われるわけです。そうしまして、勅許を求めた。ところが、天皇の方は、許可は出ないわけであります。京都のお公家さんの方は、日本は神国であると言って外国勢力を排除しようとするものですから許可が出ない。幕府は国際条約を結ぼうと言っているのですから、結局、反対派を弾圧をして、大老の井伊直弼が決断をして、結局、勅許が無いわけ、天皇の許可はないけれども、方の外国との国際条約を結ばなくちゃならん。というので、日米通商条約という条約を結ぶわけであります。

ここに今までの攘夷という外国船は打ち払えという、意見を持ってる者もいれば、国を開かねば危ういという者もいれば、天皇の意見を尊ばねばならないとの意見もあり、ここから、尊皇、攘夷、開国、和親、それから幕府を重んじよう、佐幕という意見が出ることになります。本当は、尊皇と攘夷は同じでなく、別々の意見です。それから、尊皇、それから尊皇に対立するのは、幕府を重んじる、佐幕、幕府を重んじることと、天皇の意見を重んじることと矛盾はなかったのが、幕府の方針が勅許に従わなくなると佐幕の立場が打ち出される。

次に、開国と攘夷。外国船を打ち払うか、それとも、それを入れるか、という立場ですね。この四つの意見がですね、入り乱れて、そして、尊皇、攘夷、開国、佐幕、そういうふうに分かれてくるわけであります。こうした経緯をふまえて、国と国との関係でいいますと、日米修好通商条約というのが結ばれたのであります。

2.遣米使節団の構成

その翌々年の万延元年、安政7年。この条約を批准する為に、日本から遣いが使節団が使わされていく訳であります。それが、プリントの下から二段目のところ、日米通商条約批准交換のため正使新見正興、副使村垣範正・目付小栗忠順。その3人が使節ですね。正使に加えて付随して行く人達がいる、その次に、二番目のところに、遣米使節団の構成と、いうのがありますが、これが、日本の使節であります。正月18日出帆と書いてありますが、日本使節は、正使がアムブッサートル、木村鉄太はオランダ語の人ですので、オランダ語で全部書いてあります。アムブッサートル、新見豊前守正興、この人が、正使で、次が副使で、それから目付、それから、勘定組頭、いわゆる財政担当の人がいたりですね。外国との話をする外国組頭とかというので、20人の使節団になる訳です。それに今度は、それぞれの人に付随して9人ずつの随従員が付くわけです。正使に付随して、随行員が9人。副使にまた、随行員が9人。目付に9人。と9人ずつ付いております。この他に、医者とか、請役とか、こういう人達に何人かずつ付いて行く訳ですね。3人とか5人とか付いて行きまして、その随行員がトータルで77人が行くという事になる訳です。

この人達が行く船はポーハタン号と言って、アメリカの船で行く訳です。まあそういうふうに行きました。咸臨丸乗組員一覧表というのが、一番下に付いていますが。ポーハタン号で行くのは使節団なんですね。それと一緒に咸臨丸という日本仕立ての日本の船が行く訳です。この日本の船は、海軍奉行、木村摂津守喜毅以下。有名なのは勝麟太郎という、勝海舟が艦長で咸臨丸が行くわけです。咸臨丸は日本人の船乗り、船乗りといいますが、船を運営して、勝海舟が長崎海軍練習所で船員を訓練をする訳です。その訓練の成果を、やろうというので咸臨丸は、ポーハタン号とは別に行くわけです。この時

のが、アメリカ海軍大尉ジョン・マーサー・ブルックと、その部下 11 人の人達がですね、この人達は口は出すが手は出さない。操縦は貴方達がしなさいと。指導といいますか、助言はすると、いうわけです。ですから、これはもう、完全に咸臨丸は日本人の力で行ったんだと。という事になるわけです。この 107 人の、船に乗った日本の日本仕立ての咸臨丸が行きました。そうしてですね、サンフランシスコは咸臨丸の方がですね、早く着くんです。ポーハタン号は途中で、ハワイに寄ってですね、ハワイで修繕したりして行きますので、それで、サンフランシスコには早く着くわけです。

すると、アメリカ人はびっくりする訳です。日本人の船が来た。指導のアメリカ人を見ると 11 人だけれども、この人達だけでは、とても動かすことは出来ない。日本人が動かして来たということが明らかになりました。それでまあ、びっくりした。それで勝海舟が一躍、有名になるというかですね。よく調べてみると、勝海舟は艦長なんだけれども、太平洋に乗り出した後はですね、ほとんど船酔いでダメだった。という話もあるんですけど。しかし、帰ってみると艦長ですから艦長、勝海舟が頑張った。という事になる訳です。

去年がちょうど 150 年でした。横浜の横須賀の博物館でこの、遣米使節と咸臨丸渡米 150 年展が開催されました。方や、遣米使節団であり、片や日本の船が自力で航海した偉業を展示した訳です。咸臨丸はサンフランシスコからそのまま日本に帰りますが、ポーハタン号は、それからまたパナマを通して、パナマ運河はまだ出来ておりませんのでパナマで上陸をして、汽車で、パナマ運河のところを越えて、そして向こうで、また別の船に乗り換えて、それで行くわけではありますが。その道順は、プリント 5 に出ております。

万延元年、遣米使節航路図を見て世界一周しよう。これは横浜の博物館で出したものです。1860 年の、日本の暦では 1 月 18 日に、ポーハタン号は品川を出発をします。横浜に泊まって、横浜からまた出て太平洋に行くわけですね。10 日程、経ちまして 2 月 2 日が日付変更線を通っておりますが、航米記を見ますと日付変更線の事はふれずに、そのままの日付でついていっております。そして 2 月 7 日にハワイに、石炭補給のため進路を変更して、2 月 14 日にホノルルに到着。カメハメハ 4 世、その当時ハワイはまだアメリカではありませんので、ハワイ王国ですが。そこで、ハワイを見物。それから 3 月 9 日にサンフランシスコに到着しております。そして、閏の 3 月、その当時は閏と言いまして、もういっぺん同じ月がくるわけですね。 3 月の○が付いてるのは閏月の事でありますが、3 月 5 日にパナマ西岸に到達している。そして蒸気機関車でパナマ東岸に、蒸気機関車で今のちょうどパナマ運河のところを通りまして、それから、ロアノーク号という別の船に乗り換えて、そこからアスピンウォールを出て、サンディ・フック。それから今度はハムトン・ローズですか、そこで、閏 3 月の 24 日、ロアノーク号からフィラデルフィア号に乗り換えてポトマック河をさかのぼることになります。そして 3 月 25 日にワシントン海軍造船所に到着しております。こうして横浜を出発してから 2 ヶ月 10 日位かかって到着している訳であります。

日本の暦では 4 月の 3 日に日米修好通商条約、批准書を交換する。条約批准書というのは 2 冊あり、それに両方がサインするわけです。それでこの条約が発効する。ということになるわけです。それから各地をワシントンを汽車で出て、ボルチモアに着き、フィラデルフィアに行って、そしてニューヨーク

に着き、5月9日にペリー未亡人宅を訪問します。日本に来たあの司令官のペリー提督は亡くなっておりますので、その家に行きますと、その当時ペリーは、アジアからチンと言うチンクシャーな犬を持って帰ってかわいがっておりましたが、それが、日本人の、東洋人の匂いを嗅いで自然に喜んだと言う話があるんですが、そこを訪問しまして、5月13日にナイヤガラ号でニューヨークを出発して、5月20日に西暦に調整しております。ポルトガル号、ポルト・グランデに宿泊。それから今度はポルトガルからアフリカの方を通してですね、アフリカの西海岸を通してロアンダを出港。7月10日が喜望峰。アフリカ南端の喜望峰を廻ってですね、そして、インド洋に出るわけです。インド洋に出て、そこから今のインドネシア(バタビア)、それから香港を経由して、そして9月28日に帰着しました。

1月の18日に出て9月ですから9ヶ月、中に1ヶ月、閏月が入っておりますので、10ヶ月程かかってですね、そして帰ってきた。という訳であります。その間にこの木村鉄太。その時その時のメモを書いているわけです。そのメモ帳が67冊ありました。それを6冊にまとめたものが「航米記」という、そう言う名前で、残されておったわけであります。この時に、何人かの使節の人達も記録を残しております。初めての外国、外遊の事ですから記録を残しております。遣米使節団の記録というのが、ほとんど航米記とか、航西記、だという記録になっておる訳です。このヨーロッパの特にアメリカの、風物であるとかあるいは、景色であるとか、あるいは建物であるとか技術であるとか、そういったようなものを見学して、それを書き留めておるわけであります。そういうふうにして書いたものが、この航米記だという事になります。

3.木村家系図

使節団のうち、木村鉄太はどこにいるかと言いますと、遣米使節団下の段の小栗豊後守の内の7番目位に木村鉄太、上に括弧して肥後熊本と書いてあります。木村鉄太 敬直 31歳、というこの人です。それから、もう一人ですね。熊本から行った人では上の段の後ろから10番目位のところに荒木數衛門義勝という25歳の人があります。肥後熊本と書いてあります。

実はこの荒木數衛門についてはですね、全く分からない訳であります。どういう人だったのか。分かりませんが、木村鉄太の場合は、この人が「航米記」というこういうのを残しておりましたし、それから、藩にも記録がありましたので、少しばかり分かるという事です。今から30年前に航米記を印刷する際には、木村鉄太という人はどういう人なのかというのは、あんまりよく分からなかったわけですが、肥後藩のほうの記録でですね、名前は分かるわけですね。木村鉄太という名前は分かった。それをその後、調べた結果、こういう人だったんだ。という事です。第一、侍帳といまして侍の名簿がある訳なんですけども、その侍帳には、この人は31歳で亡くなっておりますので、載っていない訳ですが、その父親だとかおじいさんだとか、という人の事がよく分からなかった訳です。寸志知行取の侍帳を検討しまして、こうではないかというので系図を作ったのが3番目の木村家系図であります。木村鉄太は一番最後の所におるわけですが、この人の父親が甚左衛門、嘉源次、それから、ひとり甚左衛門、その前が甚助と、普通の知行取りというお侍では、なかったわけです。ちょうど、真中の甚助という人のところを見ますと、この人は勘定所御用で才覚方で拾五人扶持、町独礼、名字刀御免というので、一番最初の木村与左衛門までさかのぼりますと、高瀬の町の町人なんですね。その甚助の時に寛保3年に寸志。お金を差し出すわけで、そして知行50石を貰った。それからまた、2〜3年経

って、延享二年には、百五拾石加増になって、そして御知行取列と昇進します。

御知行取というのはお侍の事なんですね。御知行取りの侍のなった。こういう人を寸志知行取と言うわけです。金を差し出して、寸志で侍の資格を手に入れる訳です。熊本藩の場合には、農村あたりには御士という存在があります。これは、寸志在御家人、在というのは地方のことです。地方の武士として認められた。御士の侍なんですね。寸志在御家人というのが、各地方に沢山いる訳です。一領一正、地侍と言いまして村には 10 人づつ位、多いところには、もっと多いところもあります。江戸時代に村に苗字持ってる人がいるというとお侍でないと名字帯刀が出来ませんの、その人は武士の資格を持っていることです。お侍の知行の仲間に入っているわけでありますから、寸志知行取というのはもう一つ格が上なんですね。肥後藩では知行取の武士は大まかに見て千人位です。その千人の中に入ってる訳であります。けれども寸志知行というなものですから、名簿に途中から出てくると、なかなかどういう人なのか、よく分からなかった訳で。それがこの甚助さんの時に知行取になって、そしてその後は寸志知行取の相続をする訳です。普通のお侍の場合は、親が亡くなると子供は親の後を受け継ぐわけですね。親の後を引き継いで、その資格、例えば親が二百石ですと子供も二百石の地位を貰うと、いう事になるんですが、寸志の場合は違いまして、金で要するに、相続する訳ですから、この次の代になると、継ぎ目の寸志と言いまして、寸志を出しますと、父親が拝領していた土地を相続する。こういう訳であります。

そういうふうにして父親の知行を相続しますが、武士としての働きは一緒です。参勤交代などにはついていけない。自分の家業がありますから。高瀬で商業をやっております。寸志知行というのは、ほとんどが貿易商みたいな人です。高瀬の貿易商とか、熊本で言いますと川尻とか高橋、松橋とか佐敷とか、ああいう港でやっぱり大量に、よそとの物資を仕入れてくるとか、こっちの品物をというやはり相当の利益がありますので、献金を差し出す事が出来る訳です。

一番大きな寸志知行と、一番早いのは、宝永年間、元禄のすぐ後ですが、だから 1715 年頃ですか。川尻の木村安左衛門という人が、銀 400 貫目を献金をして、それによって七百石の知行取になった人がおります。本当は献金を出しただけじゃダメなんです。金を大量に寸志を出すだけでなく由緒がいる訳です。木村重成のいところである。木村重成というのは、木村重成は皆さんご存知だと思いますが、大阪の陣の時に講和の使節になって、家康に誓約をする時に血判をつかせるんです。

家康という人は、もう私は老齢で血が出ない。だから朱で代行したいという訳ですね。そしたら、それは出来ないと言って小束について血判して下さいと血判をさせた人です。その大坂方の中心人物の木村重成のいところであると、こういう訳でその由緒が認められて武士の資格を貰う訳であります。

あの頃の人は皆、そういう由緒がいるんです。ですから、幕府の場合で言いますと、鴻池は山中鹿之介の子孫だと由緒を申し立てる訳です。私の先祖は山中鹿之介。そうすると、幕府が、それなら鴻池という御用商人に取立てようという事になる訳であります。由緒のある人であればが武士として取り立てられる。肥後藩の場合も同じでありまして、だから、皆、私のところは誰のどうゆう由緒があるんだと、ということを申し立てる訳です。要するに、金だけじゃダメだ。今風に言いますと、ノーネクタイだと評判が悪い人がおったりしますが、やっぱりきちんとネクタイをして、あれは礼儀正しいだとか、そういうのがあるんだろうと思います。

寸志と由緒によって取立てられた木村家の子供の、木村鉄太という人が、この人が江戸に行きまして、玉名の方で大きな事業をしておる。商売をしている人ですから金はあるわけで、江戸に遊学することも出来るわけです。その模様はですね、四番目のところに、木村鉄太の生涯というのが書いてありますので、見ていただきますと、寸志知行取木村嘉源次・甚次と、この人は高瀬町の豪商で、天明元年の「高瀬新町組軒帖」というものの中町筋上町境より下町境迄、東側の軒別に、三十三軒出ておる、高瀬の町絵図があるわけですが。組軒帳に木村嘉源治殿家代理平という名前です、間口四間、それから一間七合・一間五合・一間四合の間口、四間というのは、相当大的な店であります。

町家の間口は普通、二間程度なんです。その代わり、奥がずっと長い訳ですね。奥がだいたい二十間あります。そうした家を四間の家と一間七合と一間五合と一間四合という家を四間持っていたという訳ですね。なんでそうかと言うと税は間口にかかるんです。奥行きでなく間口に。従って間口は狭くて、奥行きが鰻の寝床のように、長いというのが、町家の普通の姿です。だから、四間の家というのは、そういう間口が広い訳です。通常の二間分位にあたります。これは、城下町の場合のお侍の邸とはまったく違います。お侍の邸は、間口が広くて奥行きがそんなになくても良いわけです。今の宅地と一緒に。税金はかからない訳であります。ところが、町家は税金がかかるので、間口が狭くて奥行きが長い。こういう家を何軒か持っていました。

先程言いましたように、木村嘉源次という人は、知行取になっている訳ですね。寸志を出して知行取になっている。知行取というと、帳簿上いいますと、武士になる訳です。そして、実際は家で商売している訳です。だから、二枚鑑札になる訳ですね。武士として名乗りを上げると木村嘉源次。家で商売をしておる。ですから、商売している時の名前は家代理平の名前で商売をする事になる訳です。家代というのを立てて、実際にはこの人が商売しておる訳であります。

武士が商売する訳には行きませんから。家代の名前で商売するという事になっている訳です。そういう人が何人かいる訳であります。家代をたてておるのは、木村嘉源次の他には、高瀬では、木村久平衛というのと、南九八郎という二人である。その他に名字をもった町役人が、古庄と荒木とう二軒が町役人である。だから、ここで何を言ってるのかと言いますと、高瀬の町では、この家は五本の指に入る一流の家でした。という意味です。宝暦期以後の侍帳を見ますと、木村嘉源次。それから木村甚次と。まあ、貳百石で。そして木村甚次の所領はどこにあたるかと言いますと、内田・高野村、中富・上小柳村、山鹿・芋生村、小田・寺田村、小田・青野村こういうふうにお侍ですから、貳百石の知行を持っていると、どこに何壱百石、どこに何石と領地を持っている訳であります。そういうふうにして、こういう寸志のお侍の家でありました。こういう訳であります。その貳百石の知行が、この人の生活費の全てではない訳なんです。資格ですから、武士の資格を持ってるということです。実際は商売で生活は立てている訳です。まあ、裕福な暮らしをしている訳でございます。

4.木村鉄太の生涯

木村鉄太という人はどういう人であったかのと言いますと。木村鉄太の経歴というので1838年。文政11年。藩校時習館に学ぶ。藩校というのは熊本城、二の丸のところに藩校時習館がある訳ですね。そうすると、高瀬の商人の子供でも時習館に行く訳です。あるいは時習館と言いますのは、農民の子供でもですね、郡代がですね、これは良く出来るやつだという、そういう推薦がありますと時習館に行く

訳です。藩校に行って、そこで勉強する事が出来る。成績が良ければ、時習館というのは8歳位で行きますので、そうすると初等科というのが、小学校程度、中等科、高等科、大学院までありますから。

一番最後の居寮正と言って、20歳位になってすべての段階を終わった人が進学します。居寮正というのは藩が費用を出して寮に入れて勉強させる。一期が三年間です。また、そこで勉強したいということであれば、また延期をする。留年ではなく留学。普通は中等が終わるのが19歳位です。19歳位になると、普通の人は学業を終えるわけです。この人は親の後を継いで侍の仕事に就くわけです。江戸時代の制度というのは、新しく仕事が増えるわけではないですから、親の後を継げばこの人はそこで仕事をするわけですね。次男さんだったら、どこかの養子に行ってその家を継げば、もう学校には行かない訳です。時習館で、あの人は優れている。横井小楠という人は優れておった。塾長になっておる。塾長は、年に五俵位の米を送られる訳であります。手当てです。酒も飲んでいいんですかな。横井小楠は25過ぎまで藩校に学んでいます。そして塾長になっておる。

これはある意味で言うと、学業を終えても行くところが無い訳です。横井小楠は三男かなんか。兄さんが後継いでいるわけですね。そうすると弟は、行くところ無いわけで、どこか養子に行くかなんかしが無いです。ですから、勉強した。だからいつまでも勉強して優れた人だというのは、行く所が無いと、逆に。そういう事でもありました。横井小楠の場合で申しますと、兄さんが亡くなってですね、それで初めて、まだ兄さんの子供が小さいですから自分が横井の家を継ぐという事になるんですが。そういうふうにして学校に行って、初等、中等、高等というふうに行って、大抵のところでは家を継ぐという事になるんですが。

木村鉄太の話に戻りますと、安政年間、17、8歳～20歳位の頃ですが、その頃江戸に遊学をして、昌平黉教授安積良斎に入門して漢学を修める。昌平黉といいますのは幕府の学校であります。そこに行って安積良斎という漢文、漢学を修めた。次いで、蘭学の手塚律蔵のところに塾に入って、そして洋学を学ぶ。洋学といいましても、だいたい蘭学であります。また、海軍官某氏にしたがって航海術を学ぶと、外国に関する知識の吸収に努めていた。要するに外国に対するあこがれを持ってですね、しかも航海術を勉強しておりました。

福岡の方で、手塚律蔵の塾におりました、と言いましたら、それは手塚治の先祖ではないかとの意見がありました。手塚治のマンガがあるんですね。なんて言うマンガですかね。それでですね、「いやあーそりゃ知らなかった」という事で調べてみたら、違う手塚さんでありました。この人は、千葉県の方の出身でしたし、手塚治の先祖は大坂の方ですね。違う家ではありました。

手塚律蔵のところで、蘭学を学んでですね。航海術も勉強しておりました。そのとき外国行きの話があるわけです。手塚があれば、遣米使節団に参加できるかも知れない。諸藩のものも諸藩が潜り込ませている、そういう話が、噂が、オランダ語を勉強している人達の中に、彷彿として起こるわけです。それで、彼は志願するわけです。使節への随行を願い出た。そういうわけで願い出ました。藩には届けなければなりませんから、藩に届け出まして、なんとか手塚はないか、という事で随行を願うわけがあります。その結果として、小栗豊後守の随員として、認められて潜り込む事が出来たという事があります。費用は自分負担ということでありますので。だいたい200両程、金がかかる。10ヶ月程、行くわけがありますから、その位はかかる。さすがに、自分の家で200両出すというのは大変だ。何とかならんか、とか言って相談をしましたところがですね、この人の場合で言いますと、ヨーロッパの事について興味

を持って何か勉強しようとしている。という事は開国派です。当時の日本の主流は尊王攘夷であるわけです。

ところがですね、この人に 200 両、工面してくれた人がおる訳です。魚住源次兵衛という人です。魚住源次兵衛というのは何かといいます、肥後勤皇党の中心人物なんです。魚住源次兵衛もそんな金持っとるわけじゃない。この人が藩から金を借りて、200 両出してくれる訳です。私が思うのに、勤皇党だろうと開国派だろうとヨーロッパとかだろうと、燃える奴、あいつは見込みがある。そうゆう燃える奴にやらせにゃいかん。そういうものだろう。表面にでた時はですね、勤皇党だとか、やれ、実学党だとか、なんとか言ってるけれども、根はやっぱり、日本の現状をなんとかしようとかですね、そういうところから出るんだらうという気がするんです。

金を出してもらってですね、結論からいいますと、この人は魚住源次兵衛には金を返す事は出来なかった訳です。帰ってまもなく、亡くなりますので。けれどもそういう時代、風潮というか時代としては、魚住源次兵衛は期待するところが、大いにあった。ヨーロッパの外国の事情を勉強してこいと思います。その費用は有志からの贈与という事で魚住源次兵衛が与えたのであります。

木村哲多は帰国後、再び手塚塾に戻りました。この人にとっては、江戸の肥後藩邸よりも手塚塾の方が住み心地が良かったのではないのでしょうか。そして手塚塾に戻って結核になる、病になる訳です。この人は 67 冊かのメモ帳を整理して、そして航米記六冊にまとめましたし、帰ってきてすぐ肥後藩自体もそういう外国事情について非常に興味を持ってる訳で、ですから、これは訊問ではないんですが、事情をどういうふうになっているかというので、調べてそれを記録したのがあります。帰って 1 週間程たってからの分と、1 ヶ月程たってからのと二度にわたって、海外の事情について、いろいろと調査をしている。こういう訳であります。そういうふうにして「航米記」がまとめられたんだと。これは品川を出発してから、品川に帰ってくるまでの、非常に詳細な記録であります。これを記録していた。それで結局、幕府はこの後ですね、遣欧使節を派遣すると言う事になる訳ですが、その時に福沢諭吉はヨーロッパの方に行く訳であります。病気になるしました木村鉄太は欧米使節派遣という事を聞いてですね、これにも随行したいと言う希望を持っておりましたが、それは叶わずに、文久 2 年 2 月 34 歳で亡くなりました。外国語について優れた才能を持っている人でありましたが、元気であればですね、かなりな仕事が出来た人だと、いうふうになるんでしょうが、亡くなりました。34 歳で惜しい人物でございましたが。

5. 遣米使節航海の日程

この随行員として、各藩から参加しております。これは随行の使節団の構成のところを見ますと、括弧して在るのが、それぞれ出身地が書いてある訳ですね。

随行では、肥後藩からは荒木数左衛門と言う人が参加した他、佐賀から 6 名。長州、加賀、盛岡、土佐、館林、出羽、仙台の諸藩から 31 名の従者が派遣され、従者として出ている訳であります。当時の諸藩も熱心でありました。特に佐賀藩は藩主が非常に熱心だったと、蘭癖といわれる、オランダきちがいの鍋島閑叟です。長崎と近い関係にある、長崎警備は肥前がやっておりますから。海外に対する情熱があったという事です。それで 6 人潜り込ませていると、いう事です。それ以外のところも興味を持っているという訳であります。手塚律蔵が書いた墓誌名の中にも出ておりますが、後ろから

5～6 行目のところに、「生及ち躍然として陪従を請ひ、海を渡りて彼の地に到り周旋探索し、且其の風俗政事及び器械工作等の事を記し、輯めて五巻と為し、名づけて航米記といふ」というので結局、その風俗であるとか、政事であるとか、器械とか、工作だとかという、こういう事について詳しく書いてある訳であります。

主にどんな事が描いてあるかと言うと、まず、ポーハタン号について、これは乗っていった船であります。長さが 77 メートルあまり、トン数で言いますと、2415 トンの木造の外輪蒸気船。外側に輪の付いてる蒸気船であります。1 日の石炭消費量。石炭で走るわけですから、1 日の石炭消費量が 50 トン、升目にして 6 石である。1 日の石炭の量がですね。

食事はどうしたのかと言うとですね、米を主食として持って行ったんですが、味噌、醤油を持ち込むんですが、これがね、アメリカ人が「これは臭い」と言って捨ててしまったというのでですね、以後味付けに困った、という話があります。滞在中、アメリカの米も食べたけども、アメリカの米はまあまあだが、魚料理がどうもまずいと。やっぱり、醤油でなくてソースかなんかなんでしょうね、おそらく。ですから魚の料理が日本と異なって、どうもまずいと言っております。

それから、先程言いましたパナマ運河は、ちょうどその当時、工事中でありましてですね、その為に、そこはパナマからアスピンホールまでの間は蒸汽車で移動をする。こういうところでありました。それからニューヨークに行くはずだったところがですね、大統領から手紙がきて、そしてワシントンに行くようになった。ワシントン DC です。パナマからはロアノーク号という蒸気船、フリゲート艦といって鉄の船だろうと思います。長さ 70 メートル、大きさは 3400 トンという大きさの船だそうです。それで行っております。アメリカ人の家庭に招待されております。

ところがアメリカでは非常にその、ちょんまげ姿がめずらしいのでしょうか、ぞろぞろ人が付いて来るので、それにへきへきしたと。と言う事でありました。さすがに建物にはびっくりしております。家は石造りで 7 階建て位である。多人数が居住しておる。日本は一軒一軒で平家ですが、そしてガス灯を付けておる。夫婦は手を取り合って歩いている。

それから大統領の事について書いてあります。大統領は任期制である。再任の制度がある。大統領がよそに出かける時に護衛を付けずに。一人で出かけておる。これにはびっくりしております。ホワイトハウスに住んでおるんですが。特記事項として、キリスト教の関係でしょうか、若妻が亡くなっても後妻をめとる事はないと書いておりますね。日本の小判とむこうのドルとの関係では、いつ来たかわからないが、日本の小判は 1 枚 6 ドルである。為替レートを記しています。

帰途は大西洋を東に、アフリカの方から廻って来る訳であります。インド洋からオーストラリア海に至って、以後、真北に進んで行く。オーストラリアの辺りに行って真北に進む。バタビアを経由して、そして赤道を経由し香港に来る日本のルートをこういうふうに記しております。彼はアメリカの情勢を報告している訳であります。新聞が盛んに出てるという訳ですが、新聞を見るとですね、勝海舟の咸臨丸がですね。これが日本人の船乗り、日本人、自らの手によって初めて太平洋を航海をした。この事についてですね、諸国の新聞が書いておる。

正月 22 日に出発をして、そして 1 ヶ月、2 月 24 日にサンフランシスコに着いたと。

ポーハタン号はアメリカの船乗りが乗っておって、ハワイで、修繕した関係もありましょうが、ハワイで寄港していったポーハタン号よりも咸臨丸の方が早く着いてる。サンフランシスコに。というので

びっくりしている。新聞記事を紹介しております。ポーハタン号を待っていたアメリカ人は、日本で始めて航海した咸臨丸がサンフランシスコにポーハタン号より早く着いたのでびっくりしているというわけです。咸臨丸は帰りもサンフランシスコから1ヶ月で帰って来た。その情報を木村鉄太はどこで知ったかというバタビア。インドネシアのジャカルタの辺りですね。あのバタビアで新聞を見た。もう咸臨丸が、もう日本に戻り着いてる。これは快挙である、というふうな記事が出ているんだろうと思います。バタビアで新聞を見たところが、そういう事が出たと。アメリカ人の船に乗って、自分達が船を操縦するという事は航海術を学んだといわれてますから。興味は持ってるんだけど、自分は操縦しなかったけれども、しかし咸臨丸は日本人が動かしてる、そしてやりとげたんだと。非常に誇らしげな事を書いております。

いろんななりが、あるんですが、例えば日付変更線の事もちゃんと書いてあるんです。太平洋の真中、経度180度のところが、ちょうど日付変更線になる訳です。ここで日にちが変わるんだ。帰りがけに書いてるんです。行きがけの時はちょっと、気がつかんだたんだろうと思いますが。それとですね、日程表を見ると和暦と西洋暦というのがありますが、西暦というのは太陽暦なんですね。ですから1月18日にポーハタン号は品川を出たというんですが、西洋の暦でいうと2月9日であるという訳です。

これは、太陽暦、これは365日ですが、日本の暦は太陰暦ですから、30日ですから1ヶ月は。お月さんのあれで、ですから、そういうふうに日にちが違っておるわけです。それで閏月というのがくる訳です。結局、360日ですから1年に5日づつ余る訳です。ですから6年に一度にはならない、1ヶ月、まるまる30日浮いてくるわけですね。ですから6年間で一度、調整をしなくちゃらん。良く分かりませんが閏月というのは、一番ふさわしい季節のところにはめ込むんじゃないでしょうかね。それでこの時は、3月に閏月が設定されております。日本の国内ではですね、太陰暦は明治5年の12月2日まで使われるんですよ。明治5年の12月2日。12月3日が明治6年1月元日になるわけです。

それで、これはどうしたかと言うと、変な話ですけど、国が1ヶ月分給料が儲かるわけですね。2日分、給料をやらない訳です。そして12月2日の次は、明治6年1月元日という事であります。ですから、国の財政としては非常に良かったという話になるわけです。そういうふうにして、ここでも世の中というのは大きく変わる訳ですね。今までに日本中心で、すべてが運営されていたところが、こういうふうに世界に日本が入ってくるという事になると、全てが欧米化していく。そういうふうに大きく時代が変わっていくという事になる訳です。

その途中で起こりましたのが万延元年3月3日というのが、日本の暦でいうと3月3日に井伊直弼が桜田門外で襲撃をされる。ちょうど、その年の事であります。1860年のことあります。万延元年というのは日米通航通称条約の批准、条約を締結したのが井伊直弼ですが、その条約批准の旅に出ている最中に井伊直弼は襲撃をされてるというわけです。幕末の最も激しい激動の時代にこの人はアメリカに行って、そして、そういう記録を残してるという訳であります。

「航米記」は1冊本がある訳であります。他にもあります。私が持っているのはですね、「熊本年鑑」の中に「航米記」が入れられています。こんなに絵なんかも入ってるんですよちゃんと、この人のは絵が何箇所かありますんで。これは熊本年鑑、何号でしょうかね。まあ、昭和40年頃だと思います。昭和40年頃の熊本年鑑の中に「航米記」が入っておるという訳であります。

「航米記」として出されて1冊本はですね、家老の木村豊久という人がですね、書写させたものです

ね。手書きのもの、それをそのまま復刻しております。非常にきれいな楷書で書いてあります。

こちらの方は、これは九州新聞に 67 回に渡って新聞に連載した事があると、最終回は昭和 9 年 4 月 2 日という事ですから、昭和 9 年 4 月 2 日に一度九州新聞には載ったそれをこの熊本年鑑に収録をした。それと別に 1 冊になつたものがあるというような事で、だから、探してみれば図書館あたりにあるかもしれない。一度、ご覧になってみると、本当に非常に面白いものであります。ご覧になればいいと思います。

例えば、アメリカやヨーロッパの地名を、漢字で全部書いてある。地名とか人名。

ワシントンというのは、あれは中華の華の字と盛と言う字とトンと言うのは、屯と言う字に貢と言うのがありますね、こういう当て字で表現している。ですから、この当時の江戸時代の末頃の、いわゆる表現といううかですね、それは、それによって知られるわけです。例えばイギリスでもアメリカでもですね、全部、漢字で表現した。という事であります。それが今もいくらか残っておって、使われるんだろうと思います。ペリーなんかでも、ちゃんと漢字で書いてあるわけなんです。彼という字と理科の理の字を書いて“彼利”と読むようになっております。

最後に

そういうなんか、その当時の面白い事をこの「航米記」によって見る事が出来るのではなかろうかというふうに思うわけでございます。